

新人看護職員研修 ガイドライン

到達目標の細項目作成プロセスの例示
掲載イメージ

P 8 ～ P 12 抜粋

Ⅱ．新人看護職員研修

1．研修内容と到達目標

1) 臨床実践能力の構造

看護は必要な知識、技術、態度を統合した実践的能力を、複数の患者を受け持ちながら、優先度を考慮し発揮することが求められる。そのため、臨床実践能力の構造として、Ⅰ基本姿勢と態度 Ⅱ技術的側面 Ⅲ管理的側面が考えられる（図2）。これらの要素はそれぞれ独立したものではなく、患者への看護を通して臨床実践の場で統合されるべきものである。また、看護基礎教育で学んだことを土台にし、新人看護職員研修で臨床実践能力を積み上げていくものである。



図2 臨床実践能力の構造

2) 到達目標

- ① 到達目標の項目によっては、施設又は所属部署で経験する機会が少ないものもあるため、優先度の高いものから修得する。状況によっては到達期間を2年目以降に設定しなければならないこともあり得る。その場合には、到達目標の技術を経験できる他部署（他施設）での研修を取り入れる等の対応を検討する。
- ② 到達目標は、「看護職員として必要な基本姿勢と態度」16項目（表3）、「技術的側面」69項目（表4）、新人助産師についての到達目標28項目（表5）、「管理的側面」18項目（表6）からなり、新人看護職員が1年以内に経験し修得を目指す項目を示している。ここでは、1年以内に経験すべき項目を★で、それぞれの到達の目安を4段階で示した。ただし、1年の間のいつの時点でどこまでを到達すべきなのか、あるいは1年以内に経験すべき項目として示していない項目をいつまでに経験することを目標とするのかは個人又は施設が決めていくものとしている。また、ここで到達の目安として示している「できる」とは、指導がなくても新人看護職員が自立して看護を実施できることを意味している。

3) 到達目標の設定手順

到達目標を設定する上では、施設の規模・機能、看護部の理念、看護職員の構成、新人看護職員を支援する体制、新人研修にかけられる時間・予算、目指す看護職員像、(どのような新人看護職員に育ててほしいのか)を検討する。また、到達目標は①項目→②詳細さ→③難易度→④到達時期の順に検討する。以下に、到達目標設定の際に考慮する項目等の例(表2)と各施設における到達目標設定の流れ(イメージ)(図3)を示す。

表2 到達目標設定の際に考慮する項目等の例

項目	考慮すべき内容の例
施設の規模・機能	施設の理念は何か 地域における施設の役割は何か 等 〔病床数 ・ 病床区分(一般病床・療養病床・精神病床・感染症病床等) ・ 病院の機能(特定機能病院・地域医療支援病院等) ・ 患者の平均在院日数 ・ 入院基本料区分 ・ 診療報酬の加算 等〕
看護部の理念	施設において看護部門に期待される役割は何か 患者がどのような看護を求めているか どのような看護師を育成するのか 等 〔看護提供システム(チームナーシング・プライマリナーシング等) ・ 看護部目標 等〕
看護職員の構成	新人看護職員を教育するメンバーの経験年数や発達のレベルの層はどのくらいか 新人看護職員に求める役割の大きさはどのくらいか 等 新人看護職員が夜勤要員となる時期 等 〔看護職員数 ・ 看護職員数に対する新人看護職員数の構成割合 ・ ラダー等による看護職員の発達段階や経験年数ごとの比率 ・ 夜勤体制・勤務体制 等〕
新人看護職員を支援する体制	施設の支援体制で実施可能な知識・技術研修の内容、研修内容の工夫 指導者の育成状況 施設全体での教育体制・環境はどうか 等 〔組織体制(プリセプターシップ・メンターシップ・チューターシップ・チーム支援型等) ・ 指導者教育体制 ・ 看護部の教育組織 等〕
新人研修にかけられる時間・予算	提供する教育内容に対して到達目標の設定はどうか 施設の予算の範囲で提供できる教育体制の整備、教育プログラムの内容 等 〔研修時間 ・ 予算 等〕
目指す看護職員像	一年目の目標と習得すべき知識・技術の内容 一年後にどのような看護職員をめざすのかビジョンはあるか 等 〔ラダー 等〕

これらを考慮して、「到達目標の「項目・詳細さ・難易度・到達時期」を施設に合わせて検討する。

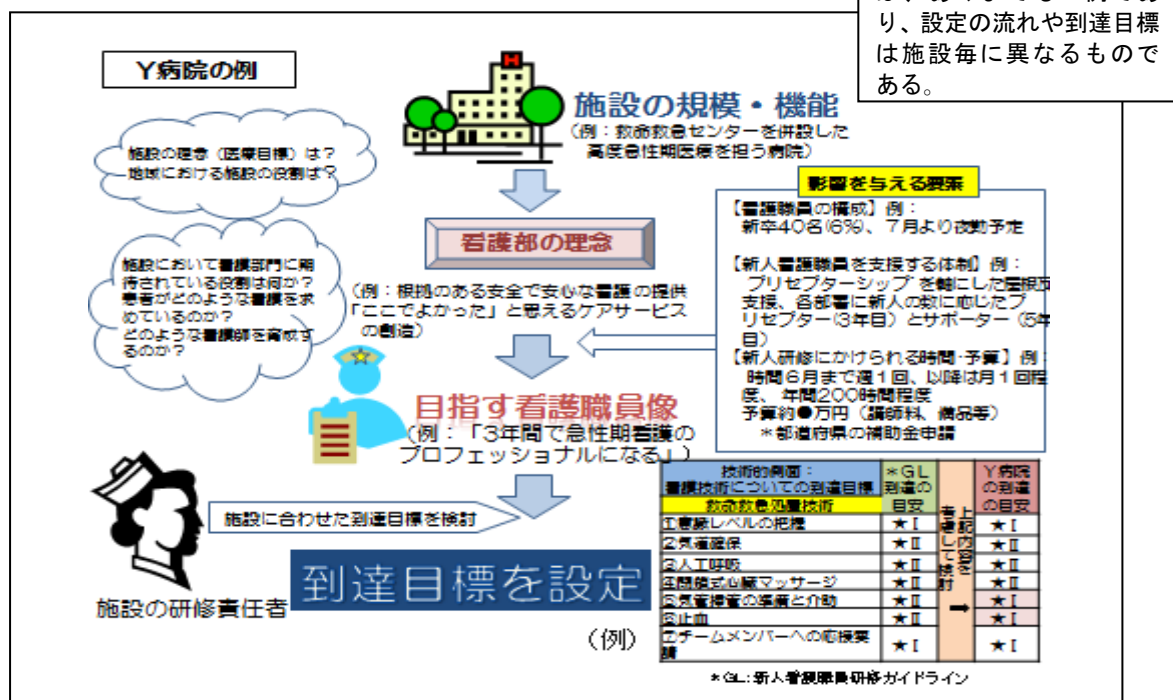


図3 到達目標設定の流れ(イメージ)

【例1】

この例は、救命救急処置技術の項目『チームメンバーへの応援要請』に焦点をあて、おもに病棟で発生した急変・救命救急場面を想定し、施設の規模や機能に沿った技術的側面（看護技術項目）の設定を行う際の手順を示している。

① 項目の設定例

A病院	B病院
救命救急処置技術	救命救急処置技術
①意識レベルの把握 ②気道確保 ③人工呼吸 ④閉鎖式心臓マッサージ ⑤気管挿管の準備と介助 ⑥止血 ⑦チームメンバーへの応援要請	①意識レベルの把握 ②チームメンバーへの応援要請 ③気道確保 ④人工呼吸 ⑤閉鎖式心臓マッサージ ⑥急変、救命救急時に必要な物品の準備 ⑦気管挿管の準備と介助 ⑧除細動器またはAEDの準備 ⑨人工呼吸器の準備 ⑩止血

救命救急処置技術の到達目標における項目の設定を行う場合を例として手順を示す。

到達目標の一覧を参考に項目を設定する場合（A病院）、施設の特徴をふまえ、知識や理解を行動レベルで示すため、独自の項目を追加して設定する場合（B病院）などが考えられる。

② 詳細さの設定例：「チームメンバーへの応援要請」

パターンⅠ	パターンⅡ	パターンⅢ
チームメンバーへの応援要請	チームメンバーへの応援要請	チームメンバーへの応援要請
1. 患者の急変時、救命救急時の行動を述べるができる。 (応援要請方法・医師への連絡方法) 2. 救急カートの場所がわかる。	1. 患者の急変時、救命救急時の行動を述べるができる。 (応援要請方法・医師への連絡方法) 2. 患者の急変を発見したらそばを離れず、他のスタッフへ連絡できる。(ナースコール・PHS等) 3. その場に応じた方法で医師へ連絡し応援を求めることができる。 4. 救急カートを準備できる。	1. 患者の急変時、救命救急時の行動を述べるができる。 (応援要請方法・医師への連絡方法) 2. 患者の急変を発見したらそばを離れず、他のスタッフへ連絡できる。(ナースコール・PHS等) 3. その場に応じた方法で医師へ連絡し応援を求めることができる。 4. 急変、救命救急時に必要な物品の準備。(救急カート・除細動器・AEDの点検・整備を含む) 5. 急変、救命救急場面において、自分の役割を把握し、リーダーへ指示を求めることができる。 6. 急変、救命救急場面に対応した記録ができる。

① で設定した項目ごとに詳細さを設定する。

急変、救命救急場面に必要な行動について各項目を最小限の行動で設定する場合（パターンⅠ）、やや詳細に設定する場合（パターンⅡ）、手順に沿って詳細に設定する場合（パターンⅢなどが考えられる。

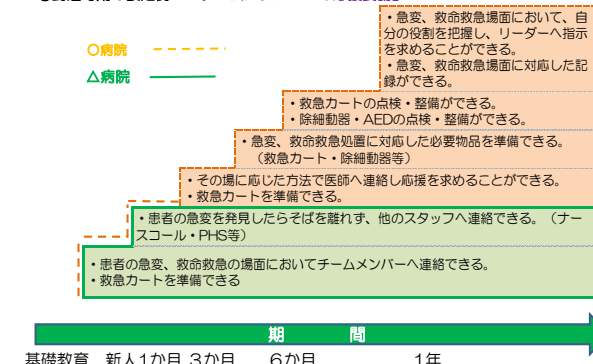
* 救命救急処置技術の場面には、患者の急変時と救命救急場面があることを想定し、どちらの場面にも対応可能となるよう記載している。

③ 病床規模や施設による難易度設定例：「チームメンバーへの応援要請」

役割の大きさ		
施設1	施設2	施設3
1. 患者の急変、救命救急の場においてチームメンバーへ連絡ができる。 2. 救急カートを準備できる。 3. リーダーの指示に従い、他の患者の安全を守ることができる。	1. 患者の急変、救命救急の場においてチームメンバーへ連絡ができる。 2. 必要に応じて医師へ連絡をし、応援を要請する。 3. 救急カートを準備できる。 4. 自分の役割を把握し、リーダーへ指示を求めることができる。	1. 患者の急変、救命救急の場においてチームメンバーへ連絡ができる。 2. 必要に応じて医師へ連絡をし、応援を要請する。(またはメンバーへ依頼する) 3. 患者の状態(意識レベル、呼吸・循環状態等)を他者に説明できる。 4. 急変、救命救急場面に必要物品(救急カート、除細動器・モニター類)を準備できる。 5. 急変、救命救急場面に必要物品(救急カート、除細動器・モニター類)を準備できる。 6. 基本的な救命救急技術を持ち、リーダーに指示を求め役割を果たすことができる。 7. 救急カートの物品(内容、使用目的、使用方法等)について理解している。 8. 除細動器・AEDの使用目的、使用方法等について理解している。

設定した項目の到達状況を判定するときの基準となる難易度を設定する。ここでは施設の規模や病床の特性などによる新人看護職員に求める役割の大きさに応じた難易度の例を示す。急変・救命救急場面に必要な役割を知識、技術を統合し判断する力、メンバーシップなどの管理的要素も含め示している。

④ 到達時期の設定例：「チームメンバーへの応援要請」



いつまでにその項目を到達するか
の到達時期を設定する。

【例2】

① 項目の設定例

A病院	B病院	C病院
活動休息援助技術	活動休息援助技術	活動休息援助技術
①歩行介助・移動の介助・移送 ②体位変換 ③体動、移動に注意が必要な患者への援助	①歩行介助・移動の介助・移送 ②体位変換 ③関節可動域訓練・廃用性症候群予防 ④入眠・睡眠への援助 ⑤体動、移動に注意が必要な患者への援助	①歩行介助 ②車椅子による移送 ③ストレッチャーの移送 ④体位変換 ⑤関節可動域訓練・廃用性症候群予防 ⑥入眠・睡眠への援助 ⑦体動、移動に注意が必要な患者への援助 ⑧ブレイルームでの遊びの援助

活動休息援助技術の到達目標における項目の設定を行う場合を例として手順を示す。到達目標の一覧を参考に自施設の特性を踏まえて設定する。一年以内に経験し修得を目指す項目に限って設定する場合（A病院）、到達目標のすべての項目を設定する場合（B病院）、さらに独自の項目を追加して設定する場合（C病院）などが考えられる。

② 詳細さの設定例:「車椅子による移送」

パターンⅠ	パターンⅡ	パターンⅢ
車椅子による移送	車椅子による移送	車椅子による移送
	1. 車椅子の準備ができる 2. ボディメカニクス（原理・原則）を述べることができる 3. 患者の状況や状態に応じた移送ができる 4. 差動心に配慮した対応ができる 5. 危険の回避が出来、安全に対する留意事項がわかる	1. 車椅子の構造や使用方法を述べることができる 2. 患者の状況に応じた必要物品が準備出来る（酸素ボンベ・点滴スタンド・廃液バックカバーなど） 3. ボディメカニクス（原理・原則）を説明できる 4. 患者に車椅子乗車と行き先を説明できる 5. 患者の身支度を整えることができる 6. 差動心に配慮した対応ができる 7. 車椅子や必要物品の準備ができる（車椅子を20～30度の角度で置き、フットレストを上げ、ブレーキをかける） 8. 患者の状態やルートなどに注意して移送できる 9. 乗車後、患者の状態を観察し、点滴ルート、酸素などの確認行動ができる 10. 患者へ声をかけを行いながら、移送介助ができる 11. 段差や傾斜時の対応ができる 12. 移送介助後の患者の観察ができる

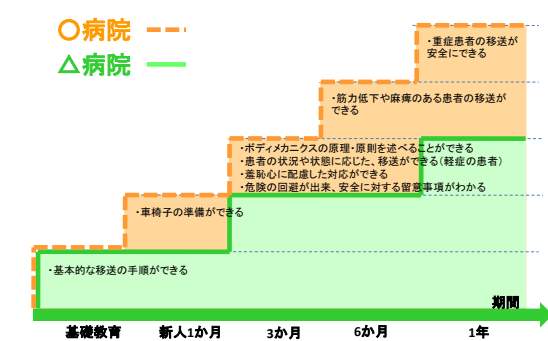
①で設定した項目ごとに詳細さを設定する。各項目をそのまま設定する場合（パターンⅠ）、やや詳細に設定する場合（パターンⅡ）、手順に沿って詳細に設定する場合（パターンⅢ）などが考えられる。

③ 難易度の設定例:「車椅子による移送」

タイプⅠ	タイプⅡ	タイプⅢ
状態が安定している患者	状態に変化のある患者 重症度が中等度の患者	重症・急変の恐れのある患者
■18歳 女性 貧血 安静度：院内フリー	■筋力低下でふらつきあり ■左片麻痺がある患者 ■下肢に強度の浮腫があり、皮膚が脆弱 ■起立性低血圧で転倒歴あり	■脳神経外科の手術後で循環動態の変化が大きい患者 ■大腿部頸部骨折で体重が100キロ ■複数の点滴ラインあり、シリンジポンプ使用、酸素投与中
難易度 →		

設定した項目の到達状況を判定するときの基準となる難易度を設定する。項目によって難易度に影響する事項は異なるが、ここでは患者の状態による難易度の例を示す。

④ 到達時期の設定例:「車椅子による移送」



いつまでにその項目を到達するか到達時期を設定する。

【看護職員として必要な基本姿勢と態度についての到達目標（表3）】

看護職員として必要な基本姿勢と態度については、新人の時期のみならず、成長していく過程でも常に臨床実践能力の中核となる部分である。

★：一年以内に経験し修得を目指す項目

到達の目安 II：指導の下でできる I：できる

		★	到達の目安			
看護職員としての自覚と責任ある行動	①医療倫理・看護倫理に基づき、人間の生命・尊厳を尊重し患者の人権を擁護する	★				I
	②看護行為によって患者の生命を脅かす危険性もあることを認識し行動する	★				I
	③職業人としての自覚を持ち、倫理に基づいて行動する	★				I
患者の理解と患者・家族との良好な人間関係の確立	①患者のニーズを身体・心理・社会的側面から把握する	★				I
	②患者を一個人として尊重し、受容的・共感的態度で接する	★				I
	③患者・家族が納得できる説明を行い、同意を得る	★				I
	④家族の意向を把握し、家族にしか担えない役割を判断し支援する	★			II	
	⑤守秘義務を厳守し、プライバシーに配慮する	★				I
	⑥看護は患者中心のサービスであることを認識し、患者・家族に接する	★				I
組織における役割・心構えの理解と適切な行動	①病院及び看護部の理念を理解し行動する	★			II	
	②病院及び看護部の組織と機能について理解する	★			II	
	③チーム医療の構成員としての役割を理解し協働する	★			II	
	④同僚や他の医療従事者と安定した適切なコミュニケーションをとる	★				I
生涯にわたる主体的な自己学習の継続	①自己評価及び他者評価を踏まえた自己の学習課題をみつける	★				I
	②課題の解決に向けて必要な情報を収集し解決に向けて行動する	★			II	
	③学習の成果を自らの看護実践に活用する	★			II	

以下省略